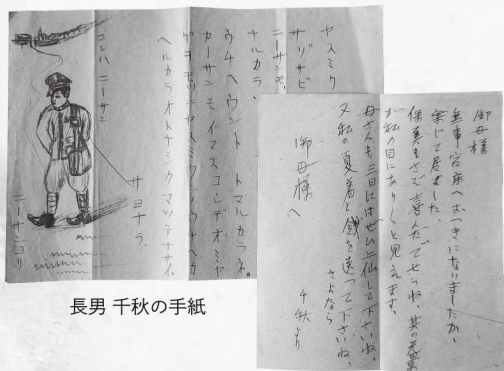


「情熱の歌人」とも呼ばれた原阿佐緒。阿佐緒の人生は、決して平坦なものではありませんでした。阿佐緒は二人の息子たちと母親を故郷に残し、遠く離れた地で暮らすことも多くありました。しかし流浪の日々にあっても、阿佐緒の心の中にはいつも故郷の風景とそこに暮らす家族の姿がありました。故郷宮床の地の山々、季節を彩る野の花、幼い息子の手にしっかりと握られた小さな栗の実。そんな小さな風景が阿佐緒の心を支え続けていたのです。彼女が夢見、求め続けた日常は、どんなものだったのでしょうか。残された資料から紐解きます。

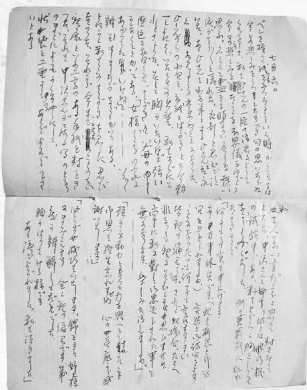
山深く子を守り 母にてあらむわが相恋ほし



息子たちと



長男 千秋の手紙



若き日の日常が綴られた日記



晩年の装飾品



阿佐緒の手編みの衣類



次男 保美と



交通のご案内

- 仙台駅より宮城交通バス→「富谷営業所」行き「富谷」バス停下車、タクシーに乗り換え約10分
- 東北自動車道大和インターチェンジより約15分
- 仙台北部道路富谷インターチェンジより約10分